

早春賦

市川茂子

街路樹の根元うずめて冬の陽にどうだんつつじ朱に燃えたつ
冬晴れの陽に照らされし大櫓ほつえの線を空に描けり
ふり返るいとまなきまま九十の齡よわいを越えて年改まる
大雪の予報つぎつぎ出でくるに吾れのめぐりは大禍なく過ぐ

立春のいまだ寒きをなげくとき広がるコロナの感染止まず
あまおうに砂糖をふれば切り口ゆ出でくる汁は赤き血の色
夕食にフルーツつまむ箸のまま一つの不安に心さわだつ
ふり上げし拳はどこに下ろすべく和平をさぐる国々競う
スイートピー、黄のカーネーションとりどりに活けて明るむわが早春賦
春がすみ立つ夢のなか花野ゆくたわむれながら蝶の前後を